



福祉と住環境を考える

ふくてっく

2006年 5月
第70号

特定非営利活動法人
ふくてっく

559-0034大阪市住之江区南港北2-1-10 ATC ITM棟 11F イヅゞ以L
TEL/FAX 06-6614-6800 ホームページ http://www.occn.zaq.ne.jp/fukutech/

あなたは我慢できますか

災害時のトイレを考える

3月定例学習会

平成18年3月4日(土)
福祉用具部

(三浦) 阪神淡路大震災に

関する資料は膨大だがトイレをテーマとしたものはわずかに3%しかない。女性の場合はトイレを我慢することが多く、それが起因して様々な疾病につながることも多い。

この度、クレオ大阪の助成をいただいて、女性の視点で災害時のトイレについて調査してみた。調査結果を分析して、ふくてっくとして災害時のあるべきトイレについての提言に結びつけたい。

(清水) 大阪市危機管理室に問いあわせたところ、大阪では広域対策とは小学校区単の対策を考えているとのこと。小学校には災害時用の備えとして2〜3日凌げる規模の備蓄対応を講じ、これが機能しない時には広域を単とする対処として下水道を活用したトイレを検討している。ところが今まで5年間試しても使ったことがなく、本番で役に立つかは未知数だが、担当者は前向きだが、予算の都合もあって順調ではない様子。
(鈴木) 東京都の取組をビ



助成をうけて調査結果をまとめた冊子

デオ紹介
地震を直接の原因とせず、その後に亡くなった多数の方の死因にトイレ事情が深く関わっている。阪神淡路大震災でも避難所のトイレは断水で使用できない状況になり、人は我慢を余儀なくされた。その結水分解取を控える人も多く、脱水症状によって血流が悪化し、様々なストレスや運動不足も災いして、脳梗塞や心筋梗塞などが多発した。まさにトイレ問題が人の命に関わったのである。
東京都では、こうした教訓を踏まえて、水洗できる災害時トイレを目指している。阪神では30万人以上が避難生活を送ったが、もし東京に巨大地震が起きたらおよそ260万人が避難生活を余儀なくされる。100%近くが水洗化された東京で水が流れなければどうなるだろうか。実験によれば、大便を水洗するには最低でも5リットルの水が必要になる。一家庭では浴槽に溜めておけば家族数日分をまかなえることになる。東京都では井戸水を活用したマンホール型トイレの整備を進めている。また千数百カ所の井戸の所在を記した井戸マップを公開して、災害時には個人所有の

井戸を誰でも使える体勢に
なっている。

(古場) アンケート結果の報告
回収したアンケートのうち女性のもの139サンプルを分析した。回答者の年齢では60歳代が多い。どのようなときにトイレを我慢するかという設問に対して

「異性の目が気になる」が多く、改善すべき課題を伺わせる。また、和便器・洋便器のいずれがいいかについては意見がほぼ同数に分かれた。興味深い結と思われる。
(三浦) 大阪の場合は大阪にふ

「異性の目が気になる」が多く、改善すべき課題を伺わせる。また、和便器・洋便器のいずれがいいかについては意見がほぼ同数に分かれた。興味深い結と思われる。
(三浦) 大阪の場合は大阪にふ



大阪市から災害用のトイレを借り、ATCエイジレスセンターに展示してアンケートを行いました。

さわしい提案をしたいと考えている。皆さんのご意見をお聞きしたい。今回は基本的な調査として集約し、本格的な提案は来年度に取り組んでみたい。
(記 中北 清)

定例会のお知らせ

日時	6月	6月3日(土)	13時	30分	17時頃
場所	大阪市立社会福祉センター	会議室	講師	田中 一成氏	大阪工業大学
テーマ	「環境デザインの世界、関係性をデザインする」				
日時	7月	7月1日(土)	13時	30分	17時頃
場所	大阪市立社会福祉センター 会議室				
学習会	未定				

東大阪検証活動の

始まりに際して

中北 清

いよいよ東大阪市からの受託事業として住宅改造費適正検証活動が始まりました。

私は、ここにふくてつくにとつて2つの大きな節目を感じています。

1つ目は、「コミュニティビジネス」(以下「CB」という)への発展を目指してこむねつと事業部を発足して早2年になります。紆余曲折を経てようやく本格的な活動の第1号が実施に至ったということです。

いうまでもなくCBの醍醐味は、行政にはできない、企業はやらない課題に市民の視点と専門職の見識で取り組む。しかもそれをボランティアや職業的使命感に裏付けられた社会奉仕としてではなく、ビジネスとして成立させることにあります。ボランティアであるなら簡単なことでも、ビジネスとすることは大変難しいことです。しかしながら、社会には膨大な課題があり、それは益々複雑で目に見えないものになってい

るはずなのです。

けれども、まだまだ私たちの活動がCBと置つけられるのは容易いことではありません。これまでの有償方式ボランティアとはどこが違うのか。各メンバーの本業との線引きはどうなのか。会としてこの活動をどのように置つけ、社会に発信して行くか・・・。私自身にもまだ見えないし、メンバーそれぞれに思う所も異なるでしょう。まあ、しばらくはゆるりと様子を見ながらこぎ出して行くしかありません。

2つ目は、ふくてつくが平成5年に「福祉機器・住宅研究会」として発足して以来の基本課題である、住環境への取組みについてです。ふり返れば、会発足当時は介護保険もなく、また概して景気も良かったせいでしょうが、巷の大工さんや工務店は高齢者や障害者の住居改善には見向きもしなかつた。そんな中、当会が有償方式のボランティア活動として取組始めたわけですが、これが新鮮で大きな話題となったのは周知の事です。その後、介護保険の施行が契機となって、住宅改修は爆発的に普及し、

いまではすっかり民業として定着するに至っています。当会への改修依頼はかつて減少傾向にある有様です。住環境整備がこのように普遍化したことは、大きな流れとしては肯定すべきことに違いありません。しかしながら、不心得な事象が多発していることも事実として認められ、そこに今回の委託事業を発する起因がありました。ふくてつくに新しいミッションが求められているのです。

この度の介護保険改正にも盛り込まれていますが、施設重視から在宅重視へと転換しようとする福祉施策のなかで、住環境の質は益々重要な課題になりつつあります。ただ、誤解してはいけません。それは単に「住宅」というハードの質ではなく、「住まう」という事に関するトータルな環境、すなわち「地域の福祉力」をいうのですから、ハードとしての住宅環境などは、基本には違いないが、ほんの些細な問題でしかありません。実際、住宅を完璧に整えたとしても、そこで人生を全うできるかと言えば、なかなか難しいものがあります。

かつて殆どの人が最期を

自宅で迎えることができずは住宅を改修する役割に、この度の事業でその適正を検証する役割を加えました。しかし、これはまだまだ続く新たな一歩の始まりでしかないのです。

介護予防と

地域包括支援センター

介護保険法が改正され、今年の4月から介護予防システムが導入されました。軽度の要介護認定者の増加を防ぎ、給付費を抑制するのが目的です。

介護予防の内容は筋力トレーニング、栄養改善などの新メニューと、現在行われている訪問介護やデイサービスなどを予防型に変えたメニューからなります。「要支援」は「要介護1」の人のうち、新たな認定区分「要支援1」「要支援2」と判定された人が対象となります。

この新しいサービスを

ことば・コトバ

「要介護1」の人のうち、新たな認定区分「要支援1」「要支援2」と判定された人が対象となります。

この新しいサービスを

包括支援センター」に申し込みます。同センターは公正・中立な立場を保つため市区町村に設置され、保健師(または経験のある看護師)や主任社会福祉士が常駐します。

ケアマネージャーの多くが事業所や企業に所属しているため、営利優先で過剰なサービスの勧誘を避け、結果的にサービス利用が増えすぎたという懸念が判断。市区町村が責任をもって運営する地域包括支援センターがサービス利用計画をつくることになりました。厚生省は給付抑制の要と置つけています。

住宅改修 事例報告

昨年12月2日に住宅改修初期診断に関西ハウズイング谷岡さん、ケアマネジャー山内さん（やわらぎ）、小川で行って来ました。

当日は対象者である人形作家のお母さんは不在で、娘さん夫婦が立会いのもと実施されました。このパターンの時は、実際の行動、不便な所が解り難くどう計画するかは判断が出来ないのでこの住居の場合、住宅スペースに問題があり、まず最低限、それを解消する事でスタートしました。

それは便器前スペースの狭さでした。便器先端よりドアを開めた状態で23cmしかなく、現状は扉を開けたまま使用していたそうです。そのドアの下枠は20cmの段差が有り危険でした。

トイレの拡張は、隣接する浴室ドアの関係で不可能である為、現状壁置での計画を余儀なくされました。

そこでまず、便所スペースには不釣合の大きさの温

風洗浄便座と便器をコンパクトな物に、又、後ろに何故か空いていた空間(20cm弱)を移動して設置する事でスペースを確保する事にしました。

更に、片開きドアを片引戸にする事で壁厚分をプラスして約5cmの便器前スペースが出来ました。

その他は、玄関、洗所に段差があったので縦手摺をつけました。又、洗所のアコーデオンドアも片引戸に変更しました。(介護保険外)

今回は介護保険に関係ない所も改修に加える事を谷岡さんと相談して提案してみました。

便所を片引戸にした事で戸当り(壁)を作る必要があり、普に作っても白くないと思

い、戸当りの裏側(廊下にする)に飾り棚を

設ける事にしました。たいしたスペースもれず2cm程の幅の小さな物ですが、大変喜んで頂き、後日お伺いすると「輪ざしと人形が飾られていました。最後の日に娘さん夫婦のお話を伺っていると、このマンシヨンの中でもたくさん改修が行われており、この改修を見にこられた方からは、評判が良く「お願いしてみようか」と言う方がおられたそうです。



→便器前が広くなりました



→戸当りの裏側に作った飾り棚

子ども 木工教室

エフ・エー

4月2日(日) 10時〜12時。ここは毎年春に行われている親子木工教室です。この日は大雨で、親子で20名弱の参加でした。

場所をお借りしている大長ハウスさんより材料の提供がたくさんあり、お母さん、お父さん方も熱心でした。おばあちゃんも参加した子どもが同じ物を50組作

今回、新しい試みが出来た事、ひよっとすると改修より？も喜んで頂いている飾り棚等、これからも少し工夫を凝らして改修に望みたいと思います。(小川 忠雄)

こどもカーニバル



4月23日(日) 大阪城公園太陽の広場。恒例となつたこのお祭りに、大阪市ボランティア情報センターさ

んのブースで参加させて頂きました。

お天気は少し雨が降ったりとまあまあでしたが、たくさんの人出があり、木工教室も2張りのテントの中は大繁盛。子どもも親も夢中で作品づくりを楽しんでいました。見本に鯉のぼりを出していると、子どもの日が近いので作りたいとの希望も多く、対応に追われました。

忙しくて大変でしたけど、楽しく終えることができました。皆さんお疲れさまでした。

参加者 有馬・杉浦・八木・松本・原田・長岩・小川・西川・光川 (光川 環代)



るといので、西川さんと光川が手伝って出来上がり、子どもはとても嬉しそうでした。

雨にもかかわらず、ゆったりと行えた木工教室でした。

参加者 有馬・長岩・原田・西川・光川 (光川 環代)

超高齢化社会と 高齢者の住環境

4月定例学習会

平成18年4月1日(土)

住宅改修部・研修部

* * *

今日の最大のテーマは人間の尊厳です。日本人の寿命は、1947年では男50才女54才だったが、2004年には男78才女85才と、50数年で30才も寿命が延びている。これは世界に類を見ないことだ。その背景には様々な要因があるが、医療の充実もその一つ。一方で、日本の医療費は3兆円に昇るが、うち二兆円が70才超の老人医療に、そしてその5%が延命治療に費やされている。

老化と死は動物みな避けられないことだ。元気でここに、プライドをもってぼっくり死（PK）が理想。でもこううまく死ねたらいいが・・・

介護が必要になった時に、子に世話を希望するのは32%に過ぎず、7割近くは子供の世話をきらう。

どこで死か？①自宅（実際には介護がむづかしい）②特養（入所がむづ

かしい) ③有料老人ホーム(高額)・・・どこも行くところがない。

以上、畑会員の問題提起を受けて、4テーブルでバスセッション。

発表

■Aテーブル 畑さん(畑会員の叔母さん)

年寄りでも心配があつてこそ痴呆も少ない。街にお地藏さんがあつて地域コミュニティがあるとよい。独居老人が増えているが、独居には案外痴呆は少ない。公園でも女の人はグループで話しているが、男性は一人。男の人は輪に入りにくいようだ。年寄りだから女も男もなしにしてはどうか。

誰でも両親やお年寄りの介護が心配。たして病院や施設に入って良いものやら、けれども残る家族も大事。どちらがいいか結論はでない。老人本人に責任をもつてもらうのも大事。なんでも構うのがいいわけでもないだろう。私自身、今日は大いに勉強できた。本当にありがとう。

■Bテーブル 立溝会員

結論をいうと、生きて行くのは大変だが楽しく努力しよう。今のお年寄りにどうこうせよは無理。次世代

の高齢者、つまり団塊の世代はそんなに長生きするのかが疑問。今から心の準備をしよう。でも具体的な対策は難しい。元気な人とそうでない人がでてくるだろう。元氣組が不元氣組を支えるシステムを創る。

■Cテーブル 磯田百合子会員

このテーブルはバラエティーにとんだメンバーで、色んな意見が出た。障害をもつご夫婦はバリアフリーのマンション住まいだが、一人になったらどうしようと思案。老人ホーム経営者も苦労様々。また、親がPKだったのはよかったという回想も。これという結論はないが、老後は自宅が理想だが介護や環境での課題も多く、経済的にも大変、マンションだと助けてくれる人間関係が希薄。老人ホームは経済的

にもしんどい。

■Dテーブル 脇坂さん

尊厳が今日のテーマだった。自宅での介護をどう保証するか。良いでは一人暮らし。今の年寄りは一人暮らしに慣れていない。でも、一人になると外とのコミュニケーションが衰えるなど、様々な支障がでる。

次に日常生活をだれが倒れるか。大きな柱は家族。最後は家族に看取ってもらいたいという希望がある。これには戦前と戦後の違いはあるようだ。施設に任せきりでいいかという憂い。施設、小規模多機能、グループホームが増えるが、これさえにもなじめない人もいる。加えて施設その他の社会資源の情報が行き渡っていないことも課題。都心への高齢者のリターンが増えているが、町に税金は落ちない。

惚けないために、社会参加・交流が大事。特に男性はえてして自分の地域で何もしていない。2007年問題(22年生まれのリタイヤ)がクローズアップ。これからの高齢者、今の高齢者がいかに社会に関わるか。お上がやってくれる意識がまだまだ残っているのが現実。市民自治の意識を

急ぎ育てる必要がある。

■講評 畑会員

皆さんご苦労様でした。

Aテーブルでは三浦さんが、国民年金の場合は経済的に施設入所は難しく、死まで働く必要があるが、それがかえっていいのではないかと言われた。今では高齢者1人を3.4人が支えており、これがいずれ1.5人になるといわれる。高齢者の定義を50才から70才にしたら、たちまち5.25人になる。

叔母の長寿の秘訣は早起きと太極拳。そして謡曲の先生もしているなど、とにかく忙しい。それから地域の人の世話。そしてよく笑うこと。趣味に生きるより人のために生きる人生。

また、佐藤先生は、夫婦いて両方惚ける事はないという指摘。一人惚けると一方は惚けないらしい。夫が先に死のは89%だが、その後、残された妻は元気になるケースが多い。逆に妻が先に死と夫は3年で死。若い頃から居していると一人になっても寂しくない。いつでも仲良しも考えものだ。現実にはダブルベッドの人は離婚率が高いらしい。地域コミュニティを育もうというが、都会では特に

男はそれは不可能に近い。古くから形成された町はよいが、新しい町では可能性はない。男50才で退職して地域で参加できる所などないが、ふくてつくがそうであるように地域にこだわらないでよいのではないか。

最後に、老化防止7原則を紹介する。

1. 軽い運動
2. ストレスをためない(ストレ スをためるのはいやな人間 と会うこと)
3. 小銭を持つ(大金はいら がゆとりが必要)
4. 趣味よりも人のため(役 割療法) ↓生き甲斐をもつ
5. 笑う
6. 健康診断をうけない(身 長・体重・血圧だけは信 用できる)
7. すけべえ心

(記 中北 清)